

九州の天神大神 伊勢神宮105P 伊勢神宮105P 伊勢神宮105P
 伊勢神宮105P 伊勢神宮105P 伊勢神宮105P
 伊勢神宮105P 伊勢神宮105P 伊勢神宮105P

3,378^P-2/3

3332^P-2/2 3332^P-2/2 3332^P-2/2

伊勢神宮105P 伊勢神宮105P 伊勢神宮105P

物部十千根命

倭姫命につき従った五柱の命らは

宇佐に相当する北伊勢迄は行ったと思

われる

しかし、目的地である北伊勢の鈴鹿奈良

我志忍山に造られた神宮に目出たくも天

照大神八咫鏡が御鎮座された時

事に大任を果し終えた五柱の命達は、大倭国

九州の方へ帰っていったのではなからうか

すなわち、宇佐の地形にもよく似た所を求めて

北伊勢から南伊勢へと向かわるが

その行幸に、五柱の命達は

随従しなかった

のであろう

予め

天照大神が大和国の笠縫邑を出立された

は、垂仁二十五年三月十日のことであり、

OK 3372^P

③ 3384^P 3369^P - 3/3 「あた」まだ、これの形にたぐない。
 ③ 3384^P 3369^P - 3/3 紀上 270^P 注15
 ③ 3382^P 591^P ③ 3371^P ③ 3384^P 紀上 270^P
 ③ 3384^P 3393^P 同天 3378^P - 3/3

天照大神が南伊勢の^{あまてらすおほみかみ}日^ひ邊^へ遇^{あひまひ}宮^{みや}に御鎮^{みくら}座^ざになるのは、垂仁二十六年十月のことであ
 るという。(垂仁紀二十五年三月十日条、
 及び同系一書の所伝参照)
 ④ もーかーたら、
 天照大神(八咫鏡)が大和国の笠縫^{かさぬい}色^{いろ}を出^{いっ}発^{はつ}されたのは、垂仁天皇に相当する^{あまてらすおほみかみ}⑤ 五十六^{五十六} 欽^{きん}明天皇の二十五年三月十日のことであり、
 天照大神(八咫鏡)が南伊勢の^{あまてらすおほみかみ}日^ひ神^{かみ}宮^{みや}に御鎮座さ
 れたのは、出^い発^{はつ}して一年七ヶ月後の^{あまてらすおほみかみ}欽^{きん}明天皇^{あまてらすおほみかみ}二十六年十月^{あまてらすおほみかみ}だっ^{あまてらすおほみかみ}たのではな^{あまてらすおほみかみ}かろう^{あまてらすおほみかみ}か^{あまてらすおほみかみ}と想像さ^{あまてらすおほみかみ}れる。^{あまてらすおほみかみ}第^{あまてらすおほみかみ}47^{あまてらすおほみかみ}表^{あまてらすおほみかみ}「日本書紀」(上)日本古典文
 学大系、岩波書店、二七〇頁注一五。同五九
 一頁補注六一〇参照)
 *

④ 度会宮^{わたらいのみや}

解さる 3379-1/3 219

3,379-1/3

井上 242° 76120° 小林 433°
掌 任事 紀上 270° 受け持つ

二十六年八月三日条参照)

とすれば、
少くとも、五大夫の一人である物部十千根命は、南伊勢まで随従しなかつた。

と理解される。(「伊勢神宮」按井勝之進、学生社、一〇五頁参照)

①天照大神(八咫鏡)を奉じる倭姫命とともに北伊勢の鈴鹿奈具志忍山の神宮に到った。五人の大夫のうち、物部十千根大連は、

と云う重大な使を以ている。物部十千根大連は、自ら出雲国へ行き、神宝をよく調へ、はつきりと報告した。それによって、神宝を掌ることになった、という。(重仁紀)

と云うで、天照大神が南伊勢の度会宮にへお遷りになる二ヶ月前の垂仁二十六年八月に、五柱の命の一人である物部十千根大連は、勅を奉じ、出雲国の神宝検校に

実は龍原宮であろう)

紀上270⁰末2行
1 276⁰末4行
④ 2771⁰-3/2
⑤ 2772⁰-3/2

3,379^P-3/3

H4.11.10(火)
H8.9.20(金)

前6行

④ 2773⁰
1/2 13行
ケンキョウ

欽明天皇の

勅を奉じ

日出雲国に

赴いて神宝検査を行ない、その後、西の大倭国

(九州)の都へ戻って報告した。

② 西の大倭国(九州)の重臣である

他の四柱の命たちも、北伊勢に留

まていなりで、大倭国(九州)の都へ

の帰路を急いだ、

ということなのであろう、と想像される。

長らく

*

①

あるいは

物部十根大連は、

北伊勢の

物部十根大連は、北伊勢の日出雲国に

ら、日出雲国の大和の石上へ赴き、

石上神宮に、神宝を納める

高倉(倉庫)に登って、神宝検査を行った。

② 永が機縁と云う、物部連等が、石上神宮に神

宝を掌るようになった、

ということなのか、知れない。(重仁紀二十

六年八月三日条。同、十七年二月五日条参照

第四十五章入天の神庫も樹梯の随に、の項に

紀上276
OK
電
有

理解され 紀下 415 末
 3379-3/5 石上の神宝とみかへ
 3379-3/5 下サ
 紀下 276 末 3.379-3/3
 427/16 H28(2016)5.15
 87 61 重前 99 年
 87 年 20 年 → おかし
 今明前 41 年
 26 年
 今明 32 年前
 12 年
 紀下 270 末
 15 年
 今明前 41 年
 26 年
 今明 32 年前
 12 年
 紀下 270 末
 15 年
 今明前 41 年
 26 年
 今明 32 年前
 12 年
 紀下 270 末
 15 年

おいて既述
 ちなみに述べると、

垂仁紀 二十六年八月三日条に、

天皇、物部十千根大連に勅して曰はく、
 倭使を出国に遣して、其の國の神宝を
 校へしむと雖も、分明く申言す者も無し。
 汝親ら出雲に行りて、校へしむと定め
 たまふ。則ち十千根大連、神宝を校へ定め
 分明く奏言す。仍りて神宝を掌らしむし
 とある。

(六年後の)

②また、垂仁紀 八十七年二月五日条に、

然して遂に大中姫命、物部十千根
 大連に授けて治めしむ。故、物部連等、今に
 至るまで、石上の神宝を治むるは、是其の
 縁なりとある。
 (七支刀などであらう)

日本書紀の編纂者は、

神宝校へしに係る一連の出来事をあえて二つ

に分け、一は、いかもその二つを遠く切り離

して、全く別のことであるかのように述べた

(※)

八土記 436P
居心地が悪い
太陽」伊勢神宮 78°

3.380-1/2

加太の御
神宮
紀上 242
御気色 広 687°
大神宮 3370°

「太陽」伊勢神宮 78°
住みよいとろをさかしく求め
南 3367°
南 3372°

住みよい所を求めて願ひ給ふ國を求めて

北伊勢の神宮に天照大神をお祭りした

とはいえ、倭姫命の御気色は、なぜか

いらよろしくない。

なるほど、宇佐の大神宮（内宮）と、

北伊勢の神宮（外宮）とは、

都からの方向と距離

を見てみると、双方共にまさしく一致し

ているといえよう。（第 423・424 図参照）

それなのに、心を抑えようと努めれば努め

るほど、倭姫命の苛立ちは募っていくのだっ

た。

なぜに人な居心地が悪いのでしょ

う。それにて自問自答するうちに、こうつばや

かれた。

宇佐あたりの様子と、この北伊勢一帯の

様子とが、あまりにも違いすぎるからなので

はないかしら

倭姫命は、自らのその答えに、大きく頷か

北伊勢 161P
(一) 高和成 高和成
高和成 高和成
高和成 高和成

3,380P-2/2

高和成 高和成
高和成 高和成
高和成 高和成
高和成 高和成

高和成 高和成

心ココロ地チが良ヨクくないののだわわ
小た。
「そうよ。きつとそうなのよ。だから住すみ

水

馬うま城しろ峰みね

田いり宇う佐さ国くに大おほ元もと山やまの天照大神あまてらすおほみかみの宮みや日ひ内うち宮みやは、

角かく子こ山さん（セニ一いち）を主峰しゅほうとする大おほきな半島はんとう

「国東半島」の基部きぶに位置いちしてゐる

「とところ」が「北伊勢の天照大神（八咫鏡）」

の宮みや外とつ宮みや（離宮りきやう）あたりには、どう探さが

「て」も、「国東半島」に比ひすべき大おほきな

半島はんとうが見当みあたらないのである。

「つまり、さいぶん趣おもむきが異ことな

へ宇う佐さの地ち形けいとあまてらすおほみかみあまてらすおほみかみの

北伊勢きたいせの地ちで「天照大神（八咫鏡）」をまつお祭まつり

すること、倭姫命やまとひめのみことは大おほきな違ちが和成わせいを

覚おぼえられたのであうう

と拝察はいさつされる。

「この北伊勢の日ひ鈴鹿奈具波志忍山すしかのなみはしのりより

H4.11.4 水
→

三 1702

凡土記 367P 注1
海部郡 和名抄 20P
643

3.381P-1/4

高等地図
北海道 佐賀院 臼井 神久見
南海部 佐伯

他に、もっと住みよいところはないのでい
うか
倭姫命は、皆に問われた。
地図を上げてみると、
北伊勢の南方に
半島の突出部がある。
一方、国東半島の南方には海岸線が入り組
だ、海部郡。佐賀院・臼井・津久見・佐伯
あたりの突出部がある。
海部郡。和名抄、海部郡。続紀・延暦四
年正月二十七日条、続日本紀(五)新日本古典文学大系
岩波書店、五八九頁、補注三八一三六、海部郡参照
線は、海部郡一帯の複雑なリアス式海岸の規
模を、やや小さくしたような趣がある。
また、志摩半島と海部郡の突出部
は、共に、都からの方角と、距離と、い

3383
-2/3
5-6行

だいたい同じような関係にある。
■ともあれ、少々やニーがか
へ日国東半島に似てゐる地形を伊勢・志
摩一帯に求めようとすると、どうしても、
――必然的に人々の目加注されるのは、日志
摩半島である。✓
といえよう。
■すなわち、日志摩半島は、――日国東半
島とも、日海部郡ともみなすこと加出来
そうである。
■ここに、幾分強引ながら、
「志摩半島東端に位置する」日的矢野は、
日別府湾に相当するし
と考えてみたい。（第428・429図参照）
①そうすると、日的矢野の北側の日国崎と
う地名を持つ丸みのある突出部は、日国
東半島と対比される。
②そして、日的矢野から五ヶ所湾に至る
り、の教海海岸線は、日別府湾から五
カ瀬川に至る海岸線と対比される。（第18・19
に解釈さ小得るもの、のようである。）

月記435
注10

3381-3/4

月記435^P

ちなみには、
④329P 257
(修正)

参考照

参考迄なから

逸文には、三重県松阪市黒部付近にかつて

在ったという日の形浦は、此の浦の

地形、的に似たり、円形に湾曲して、弓

の的に似てゐる。因りて名と爲

せり。今は已に跡絶えて江湖と成れり。景行

天皇、茨辺に行幸して歌ひたまひ、向ひ立ち

ますらゝの狼矢たばさみ

射るや的形 茨のさやけさ

と記されてゐる。

伊勢国風土記逸文に中のこの

日的形浦は、三重県松阪市黒部付近の伊勢

湾に臨む地のことと考へられてゐる。

土記「日本古典文学大系、岩波書店、四三五

頁注一〇二二参照

もつとも、

へ北伊勢と南伊勢との中ほどに位置する松

阪の日的形浦は、

国東半島と海部郡

地名辞
1447
マツサカ
平町村字
157P
マツサカ
ポスナルカサド
256P
マツサカ

との中ほどに位置する、まるみを帯びた日別
府湾に相当する✓
といえよう。

あるいは「~~もしかしならん~~」

へ（景行天皇に比して考えられる）敏達天

皇が、まるみを帯びて見える日別府湾（的

形補）の浜辺に行幸され、歌をお作りになっ

たのかも知れない✓（第1表参照）

などとも想像されるが、定かならないことであ

ある。

挿

なお、万巻一六に、

大夫の得物矢手插み立ち向ひ

射る圓方は見るに清潔けし

という類歌がある。

大宅二年（七〇二）、持統天皇が参河国へ

行幸された時、東海岸

へ従者の舍人娘が、伊勢国の松阪あり

に想像される広大な形的の補、つまり、

日別府湾を思い起して作ったの、ろう

と考えるみたい。

（*）

11号の4p
碓氷宮(寺) 3361°
3383° 9 斤

3380
- 2/2

人々は、倭姫命に奏上してこう言った。

伊邪国（宇佐国）馬城峯の大神宮 曰内

宮
の
地
に
、
極
め
て
よ
く
似
た
所
が
こ
こ
に
あ
る
と
い
ま
す

そこは、志摩の岬の基部の山奥の日多気凸と

い
う
と
こ
ろ
で
い
ま
す

その多気町の地

二、**天照太孫**の**日****内宮**の**地****長****瓜****二つ**の**と**

ころと申せまいよう

多氣町の山中、天照大神（八咫鏡）

の神宮である。口外宮は（離宮）をお造りにな

つてお祭りになるならば、倭姫命の御心は震

1. 晴水渡ることと拝察いたします。

北伊勢の「外宮」(離宮)にお仕えする者

遠は、南伊勢への落ち着くべきところと思は

定めて、虎宮をおすすめするのだった。(第428回参考)

な
あ
い
あ
う
く
う

この多気には遠く小友天照大神の
外宮也

(離宮) 付、
飛原宮、
多気大神宮。

五
奏
長
四
日
玉
岐
波
流
磯
宮
乃
な
ど
と
も
祢
士
小

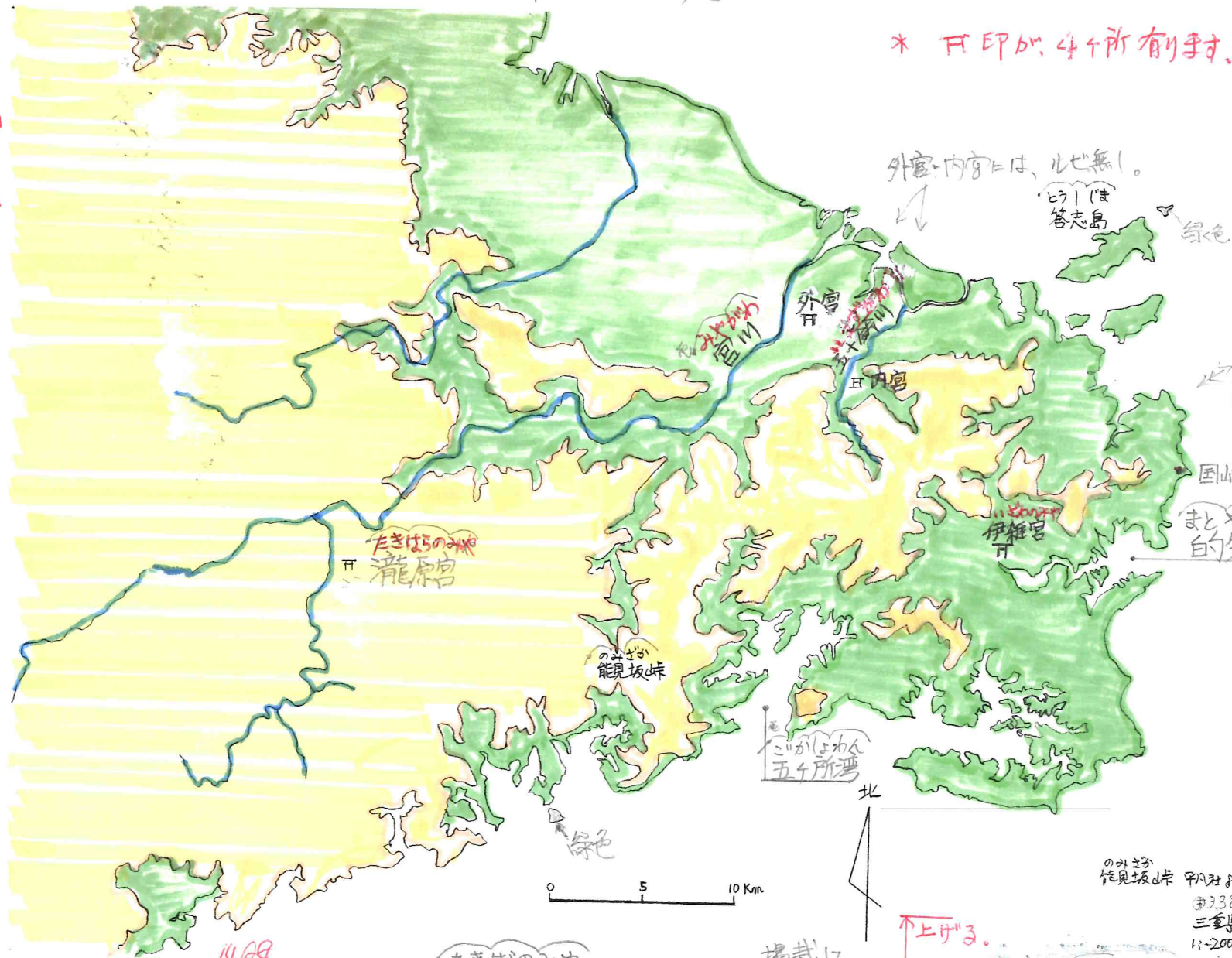
たのびあろう

3,382° - 2/6

- ・カラー
- ・「新・やまと物語」
第二巻 15頁
第61図のように、
平野: 黄緑色
山: 黄色
境: 茶色
で着色して下さい。

- ・右頁の上半分に
大きくはみ出て
掲載下さい。

- ・トースお願ひ
します。



* 印が、4ヶ所あります。

3383° - 2/3
7行

表紙の
高山地図
本の46頁

外宮・内宮には、ルビ無し。

どうも
答志島

緑色

伊稚宮
①461° - 11/2
②461° - 12/17

伊稚宮
三重県の地図
的矢湾

的矢湾
③3381° - 2/4

おうきか
逢坂峠
④1461° - 11/10
10行

能見坂峠 平野対 1° 年の230°
⑤3382° - 2/5
三重県
1:200,000

↑上げる。

掲載に
下さい

- ・写真図版
- ・写真図版
- ・写真図版
- ・写真図版

内宮
(旧外宮(現)外宮)
⑥2275° - 2/6 ⑦1996° - 3/4
⑧3382° - 4/6
⑨3382° - 5/5
⑩1461° - 12/17

第428図 龍原宮近傍図

518

- 126G
- 龍原宮の北側に、平野がある。

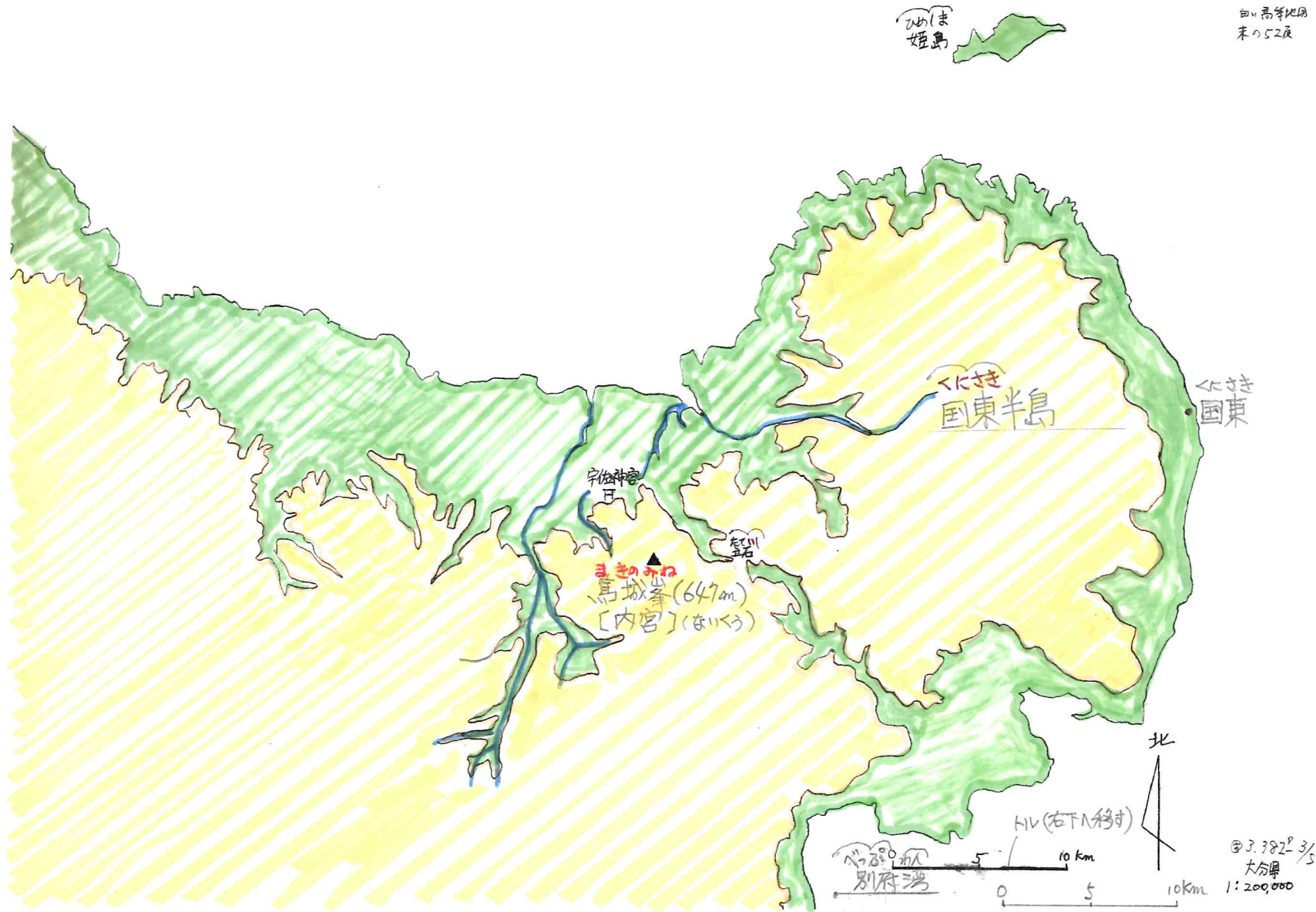
3,382^P - 3/6

・カラー

・前頁と同様の
配色に
下さい。

・左頁の上半分に、
大きくはみ出して
掲載下さい。

・トレースお願
い
します。



1406

第429図

馬城峯近傍図

1206

・馬城峯の北方に、平野がある。

519

・カラー
・右頁の
上半分に、
限度一杯
はみ出し
掲載下
さい。



適宜
カット

中心ぶり
13QG

14QG
半野牛

写真図版 616

渡会郡平野部の(旧)外宮・(現)外宮

『昭和48年、神宮式年遷宮』神宮司庁、昭和49年5月20日発行、13頁参照、

520P

千木につ
は、はみ
ない。
なくは、内
せきだ
かも知れ
ない。

3,382 P 5/6

・カラー
・左頁の
上半分に
大きく
はみ出し
掲載
下さい。

・暗くなら
ないよう
に
注ぎ
下さい。
(明るく
お願
い
します。)



(右頁の高さと合わせる)
カット
↓

1309

1429

写真図版 617 伊勢神宮の別宮『瀧原宮』

新刊 12-162頁
521P

『神宮』神宮司方、昭和61年4月1日発行、108頁参照、1209。千木の先端は、内削ぎである。(写真図版7参照)

$$12 \frac{1}{2} = 30m$$
$$3383^D - 1/3$$

「ちあ」前頁17行

2700

伊勢大神宮儀式帳は、この龍原

② 宮の所在地を ↓
伊勢・志摩両国の堺の大山中に在り
（太神）

宮より西へ相法すること九十二里
（第338図参照）

若干の出入りはあるにても
① ② の兩者はほとんど
合致している。（「延喜式」虎尾俊哉、吉川弘文館、三二
三四頁参照）

3383-
 字 神
 ① 伊勢 太神宮式 龍原宮の所在地を
 伊勢と志摩との境の山中に在り
 西に去ること九十里
 注記してあり
 伊勢と志摩との境の山中に在り
 龍原宮の所在地を
 太神宮を

といふ。へ 太陽 伊勢神宮、平凡社、一九
 六九年一月、版、七八頁参照、
 * ^{たきほう} ^{ちめい} ^{龍原神宮} は ^{たきほう} ^{ちめい} ^{多気} という地名
 をとつて、^{たきのだいじんぐう} ^{多気大神宮} とも称されるのであろ
 う。
 (ちか) 因みに述べる、

● そーて現在、
内宮の西方約三十
[キ] [ロ] 龍原宮
は鎮座している。(「太陽」伊勢神宮、平凡社、一九

倭姫命世記・皇太神宮儀式帳に

7 天照大神は、倭姫に奉戴されながら、佐

み
よ
い
と
こ
ろ
を
探
し
求
め
て
転
々
と
居
所
をか

え 北伊勢から南伊勢の海岸へやってきて宮川

をさかのほり、多気国(木竹田国)に入つて、

岐
 波
 流
 磯
 窓
 丘
 上
 鎮
 座
 土
 水
 左
 。

その後、
百船平度会館の口佐古久志呂宗治

家田田上宮(外宮のことであらうか)に坐す

現在、内宮で、おいて、宇治大内人という要職を

帯びて奉仕する礎部氏(一度会氏)一族の字

治土公の遠祖大田命加

佐古久志留伊須々乃川の川上に、好き大

宮処
か
こ
た
い
ま
す
ら

と申しあげた

号
 こ
 の
 号
 大御意鎮坐
 図
 と
 う
 と
 に

ので、**太宮**を定め奉った

と
い
っ
た
こ
と
が
迷
へ
ら
れ
て
い
る
。
へ
ろ
太
陽
に

H28(2016)5.26.
 H30(2018)9.1~9.2(4回)
 H31(2019)3.20(木)~3.21(4回)
 令和2(2020)4.5(日)~4.7(4回)

① 改定 前頁10行
 3,383^P-3/3

② 3382^P-3/2

3^P

1/4
 1/4
 1/4

*

新改訂 156

③ 3332

2/6の表

(既述。第47表参照。要検討)

と、いうところなのであろう。

小御魂代として奉斎された

③ その後、度会の日外宮(離宮)から、五

気大神宮から、度会郡へ遷された。

平野部

② 文武二年(六九八)十二月二十九日に、多

① 北伊勢から、南伊勢へ移された

鏡

天照大神の分身というべき

八咫

伊勢太神宮御鎮

六頁。「皇太神宮儀式帳」

頁。「伊勢神宮」

頁。「伊勢神宮」

頁。「伊勢神宮」

頁。「伊勢神宮」

伊勢神宮、平凡社、一九六九年一月版、七八

44. 11. 6 (金) ⑤
→ ③ 3332-⁶/₆ 157

外宮 (離宮) から、
外宮 (外宮) へ

の相互関係

先にすでに述べたが、いま一度、度会郡の

外宮 (離宮) および外宮に ついて

ておくことによりよう。
以下
第1表参照

重仁紀二十五年三月条の一書の所伝には、

倭姫命 天照大神を以て
ーーーー 伊勢国

の 度 遇 宮 (度 会 宮)
に 遷 しまつた

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

IA
L
K

八咫姫命は、天照大神(八咫鏡)を
大和国

の竹戸
縫
邑から
南伊勢の
日
龍原宮
に
多
気大

神宮へお遷しされ、その後、幾

代目かの倭姫命が伊勢国度会郡の^{イセ}渡^{ワタ}遇宮

（度）会宮
へ お 遷 し いた の で あろ う ✓

と
思
い
水
2
10

延喜神名式の伊勢国度会郡の条に、

内宮は大神宮、

外宮 外宮は度会宮、

と記されている。(第六十五章) 周行天下の項において、外宮の祭神は、天照大神にのみあてらる。明白でない。

神示 3059^P-2/8 4/5
伊勢神宮 36 13404^P 3365^P-2/3
神示 3059^P-1/11
大正 1610^P 1605^P
神示 3334^P-2/3
神示 3334^P-2/3
神示 3334^P-2/3

3.384^P-2/4

通常 3381^P-3/4
13行

奇 3385^P-1/2
14行

常識的(かんたん)観点から見ると

なるほど現代の^{かんたん}一歩々辻褄が合わないように
見える

そこで^{かんたん}通常、

「垂仁紀二十五年三月条の一書の所伝に記
されてゐる日渡遇宮は、文義上、日内宮
をさすし

と考えられてゐる。」「日本書紀」(上)日本古

典文学大系、岩波書店、二七〇頁、注一五参照)

① 宇佐国の大元山山頂の「天照大神の宮」

および龜山

は^{かんたん}内宮と称された。

② 倭姫命加天照大神(八咫鏡)を遷しまつたとき

・ 北伊勢の神宮

・ 南伊勢の瀬原宮 (多気大神宮)

・ 伊勢国度会郡の渡遇宮 (外宮の前身)

は全て、日外宮(離宮)と呼ばれた、

と考へてみた。

ところが後年、雄略天皇日武に相当す

る聖武天皇の御代のことであつたうか、

天皇の御夢に、天照大神の神示があり、

外宮(離宮)に豊受大神(梯儼)

天照大神の

改称された、

と考えてみたい。(既述)

また、時加流水

「この宮(豊受大神が鎮座しておられる外

宮)のことは、——奈良・平安時代の文献

に、度会宮と記された

という。(「伊勢神宮」桜井勝彦進、学生社

三四頁参照)

つまり、奈良・平安時代は

度会宮は、天照大神を祭神とする神宮

でなく、豊受大神を祭神とする神宮であ

る。と認識されていた。様にかうかがえる。

現在も同様に、おまつり申すこと

「外宮は、豊受神を奉祀するを以て止由氣

大神宮、豊受大神宮とも称せられ、又、度会

宮(延喜式)とも称せられる

という。(「日本社大観」伊勢大神宮)

参考文献

*

「往」大カワ 787^p
小カワ 372^p
凡上 437^p
津 一 藤 天
小阿坂 松阪

藤 天
小阿坂 372^p
世界大百科
代 4
80^p
市井 8157^p
3.385^p - 1/2

凡上 436^p

ほうたい
奉 載 2020^p

凡上 437^p
紀上 148^p
紀(里) 97^p

と
い
う
の
で
あ
る
。
（「伊勢国風土記逸文」安
す
四
十
人
の
往
人
か
お
れ
は
そ
の
半
数
の
五
十
人
を
亡
し
百
人
の
往
人
か
お
れ
は
そ
の
半
数
の
五
十
人
を
亡
し
阪
市
の
西
北
隅
、
阿
坂
の
山
に
荒
ぶ
る
神
か
お
り
姫
命
は
奇
妙
な
う
わ
さ
を
耳
に
さ
し
た
。
「行
く
手
間
近
に
せ
ま
る
安
佐
賀
山
（三
重
県
松
津
市
藤
方
を
遺
蹟
地
と
す
る
）
に
到
っ
た
時
倭
小
た
。
と
こ
ろ
か
、
安
濃
の
藤
方
の
日
片
樋
宮
に
（三
重
県
津
市
藤
方
を
遺
蹟
地
と
す
る
）
に
到
っ
た
時
倭

北
伊
勢
を
後
に
す
る
と
、
南
へ
南
へ
降
っ
て
行
か
す
こ
し
話
を
度
そ
う
天
照
大
神
（八
咫
鏡
）
を
奉
戴
し
た
倭
姫
命
は
、
北
伊
勢
を
後
に
す
る
と
、
南
へ
南
へ
降
っ
て
行
か

荒
悪
ぶ
る
神
日
猿
田
彦
神
の
為
行
荒
悪
ぶ
る
神
日
猿
田
彦
神
の
為
行
荒
悪
ぶ
る
神
日
猿
田
彦
神
の
為
行

凡上 437^p
紀上 148^p
紀(里) 92^p
凡上 437^p
紀上 148^p
紀(里) 92^p

うめさ
年 221

きかい
奇怪 538

「意味」次頁6行

意味 6行

ほろの意か?

記(四)92

漁色 584

左の区別なく

3,385P-2/2

市2889P-1/2同文

市2889

この頁16行市48章<猿田世と天字受売>

佐賀社。「倭姫命世記」参照。
なお、先述のとおり「古事記」天孫
降臨条に「猿田毗古神、阿耶訶に坐す時に、漁し
て、ひらふ貝に、その手を咋ひ合はえて、
海塩に沈溺せし」とある。
とある。
「陽物神である」猿田毗古は、阿耶訶
（三重県松阪市）へやってきた時、漁（漁色）
て、比良夫貝（で）に、このなり雑草のあい
茂った日平蕪貝、女陰の意であろう）に
其の手を咋い合はえて、海塩に沈溺（沈み）
おぼれること。物事にふけること。するばか
りにのめり込んでいった。
「意味」なのであろう。（第四十八章「猿田
毗古」と天字受売の項において既述）
そして、もしかしたら、倭姫命が耳にされた
その奇怪な噂というのとは何と
「漁色家である」陽物神猿田毗古神は、百
人の男女がおればその半数を占める五十人の

八上458°
457°

度会氏 3385 2/8 行
3,387^P - 1/3

度会氏 3392 行

度会氏 3382¹
3401¹
伊勢神宮 340, 106°

八上432°注9

ところ、日伊勢国風土記逸文より伊勢國
号に
「伊勢国は、天御中主尊の十二世の孫、天
日別命が平定した所である。云々」
と記されている。
ここに記されている「天日別命」は、伊勢
國造曰「天日鷲命」(國造本紀)と同じであり
磯部氏や和銅四年以降の「度会氏」の
祖に当り、度会氏系図では天御中主尊の一四
世系である、という。「風土記」日本古典
文学大系、岩波書店、四三二頁、注九参照)
・そもそも、いつ頃から「天日別命」と称さ
れたのか定かでないが、
「天御中主尊の十二世孫も、十四世孫も、
天日別命」と呼ばれていたの
と想像される。
・また、
「天御中主尊の子孫という磯部氏や度会氏
は、中臣氏とは決して呼ばれないところか

1500 G4 (or 1400)

第50表

磯部氏・度会氏

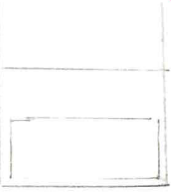
宇治大内人の系譜

(想像)

・右側の右端、
上下段に縦長の図記。
・限後一杯はみ出し掲載下す。

・文京、出来たけたい
ゴチャッ。

天目別命
527/19年



3,387^P - 2/3

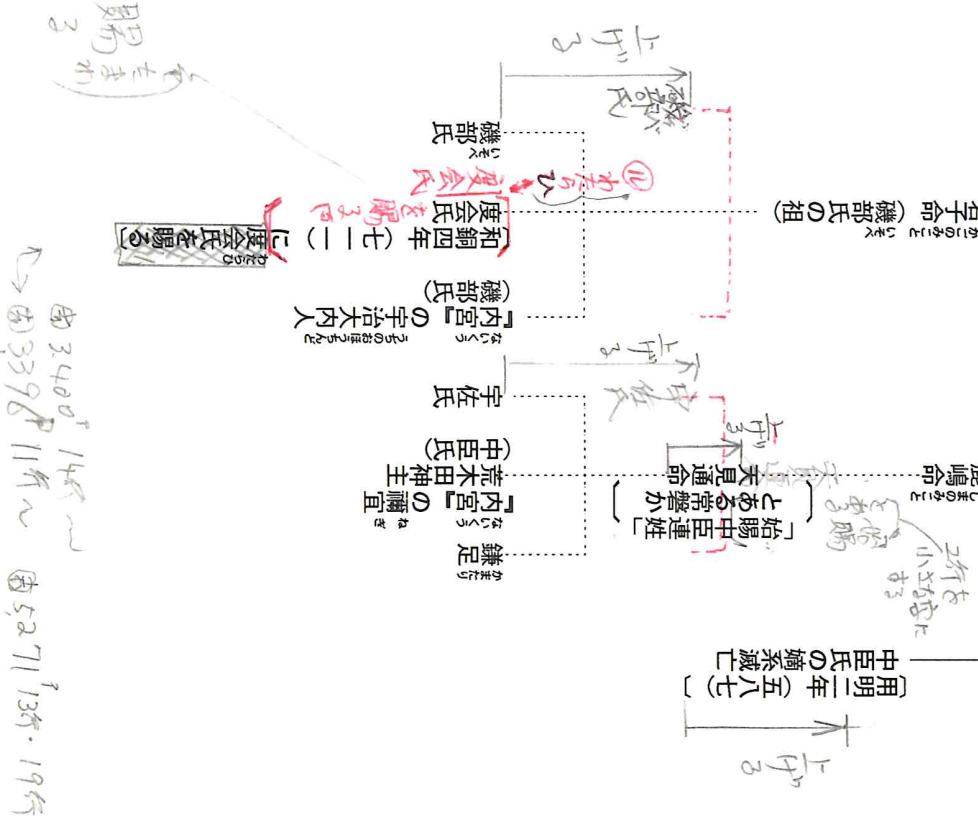
大鹿島 - 荒木田 3350^P - 3/5
ハミ子系譜

天日別命 磯部氏・度会氏・宇治大内人の系図 (想像)
大鹿嶋命 荒木田神主・宇治大内人の系図 (想像)
天日別命 磯部氏・度会氏・宇治大内人の系図 (想像)

21字
質全
二の末
はくニ。

534

3340^P
- 1/2



3400^P 14^P
3398^P 11^P
527/135.19^P

3350 1/6 正系部 支系部 とは違ふ!

度会 伊勢神宮 53²/₂ 宇治 大内人 3383¹/₂

34¹/₂ 和銅 4¹/₂ 大蔵 3365¹/₃

3,387³/₃

あまのこやねのみこと
天兒屋命 紀上112

HIV

ら推して二代目の神功皇后と伊香刀美(天
兒屋命)との間に生まれた次男日那志登美(天
血筋を引く日中臣氏の傍系筋に当るのであ
ろう) いているのだろう
と思われぬ。(第50表参照)
つまり、
磯部氏や度会氏は、宇佐氏と同族なので
あろう
と考えてみた。
なお、後代、日皇太神宮儀式帳の撰述を
行なったのは、
① ↑ ↑ 大鹿嶋命の子孫である皇大神宮禰宜の
荒木田神主(中臣氏)と、
② 皇大神宮(内宮)にあり、宇治大内人と
いう要職を帯びて奉仕する磯部氏(度会氏)
一族の者達と、
であつたという。(「伊勢神宮」桜井勝元進
学生社、三四頁、一〇六頁参照)
中臣の傍系筋である ↑ ↑ 大鹿嶋命の子
孫荒木田神主と、同族(支系筋)の磯部の
氏(度会氏)一族との間に血縁的な深い

④ 3382^o (龍尾宮)
- 1/2 (多氣大神宮)
⑤ 3392^o

121 元1120⁰
庶子(嫡子以外の子)
凡121^P ぬか什膳の子
437 伊勢神宮35^{37P}...

3.388^p

6世孫 凡記437

几止43239
 文子とらう
 子てあ33

也 あり ③ 3412
競争力
1256

2
P } 无
1 } 2368

度会伊勢神宮 53° 2', 106°
宇佐神宮由緒記(小) 19°
(皇大神宮儀式記) 43°, 20°

氏の祖といふ。↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑
るいは天日別命の若御（若君）の竟か✓は、
へ南伊勢に造られる天照大神（八咫鏡）の
神宮である。外宮と内宮（龍原神宮、多気大神宮）
の大神主になりたい ✓
と望んだのではなかろうか。（「伊勢国風
土記」逸文し人阿佐賀社参照）三回三七頁
その爲には、どうすればよいのか。
伊勢大若子命は、倭姫命の前に進み出て、

六世（せい）の孫（まご）にあたる伊勢（いせ）の（や）大若子（おほわか）命（のみこと）は不明（ふみょう）の礎（いそ）部（べ）

つながりがあり、また身分の上下関係が明瞭
 だったので、
 神氏のような競り合いがなく、仲々協力
 したの
 合えたの
 うう、と思われろ。
 睦まいく

紀上151^P

天皇の國九州に

元(皇)92^P

紀上140^P 15^行

◎紀上151

3,389^P - 1/2

元(皇)92^P

◎3385^P - 1/2

45^行

◎3385^P - 1/2 15^行

安佐賀

不地事

阿耶訶

の山の岐神

猿田彦神

は、仰せ

のとおりに、手におえない粗暴な神であります。

厚い庇護の下にありますので、私達には全く

手出しが出来ず、どうしようもないのです。

つきまゝでは、使者を遣わし、西の曰大倭

國の九州を統理してあられる大王(欽明

天皇)に奏上するのがよろしかろうと存じ上

げます。

そしてここに、大若子命は、自ら使者とな

って曰大倭國(九州)の都へ参内した、

と嘆願したのであらう。

なお、その昔、曰出雲國(近畿)を曰大

倭國(九州)に譲った大己貴神は、

て行くに当り、政神(猿田彦神)を薦め、

是、當に我に代りて従へ奉るべし。吾、

將に此より避去りなむ。

と申し上げ、長にお隠れなつた。

そにて、経津主神は、岐神を以て郷導とし

て、周流きつつ平定したのだった。(神代紀

紀上151^P 15^行 紀上140^P 2^行 537^P 上巻抄 526^P

3,389^p - 3/2

こと

紀上151^p
③ 2725^p

(F) 第九段一書第二参照。第四十五章へ猿田彦
大神^{おほかみ}の項において既述^{さるたひこの}
猿田彦神^{さるたひこのかみ}は、いま安佐賀山^{あさかやま}（三重県松阪^{まつさか}）
市^しに坐^ますとはいえ、
（九州^{くわう}）の朝廷^{てうてい}に従^{したが}え奉^{まつ}り、
か^かその任務^{にんむ}とされていた^{あろうか}と思^{おも}わ
れる。

*

前頁165^p

$\frac{1}{2} \text{ 英寸} - \text{ (3360)}^{\text{P}} - \frac{1}{4}$
 几 ± 几 437^{P} 注 27. $\text{ (3402)}^{\text{P}}$ 1157
 相 $\text{ (3400)}^{\text{P}}$ 29

倭姫命の使者として、瀬戸内海を漕ぎ渡つた伊勢大若子命は、何はさておき、先ず伊邪國（宇佐國）馬城峯山頂の天照大神を拜したに違ひないや。そしてまた伊勢大若子命は、血族である大鹿嶋命の力添えを乞うた。と推察される。そこで大鹿嶋命は、伊勢大若子命と忌部玉命を伴って、欽明天皇の前に罷り出た。

すなわち、伊勢國風土記逸文へ安佐賀社に記され、倭姫命は、大鹿嶋命・伊勢大若子命・忌部玉命を遣りて、天皇に奏聞され、

天皇は、伊勢國は、伊勢大若子命の先祖、天日別命が平定したところであつた。天日別命の子孫である伊勢大若子命よ。其の荒悪ぶる神、

内(ない)客(きやく)に(に)詣(も)いで(いで)祖(そ)先(せん)神(かみ)と

6

月土元
437P
奉行